

Title	補語と副詞
Author(s)	飯田, 才太郎
Citation	Osaka Literary Review. 6 P.97-P.108
Issue Date	1967-06-05
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25763
DOI	10.18910/25763
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

補語と副詞

飯田才太郎

§ 1. 我国の学校文法に於て盛んに使われる補語 (complement) という用語を Sonnenschein, Onions, Jespersen, Poutsma 等は用いていない。Sweet には object-complement, prepositional complement 等の語の使用が見られ又 Curme も predicate complement という呼び方で complement の語を用いている。しかし Sweet や Curme のいう complement は学校文法で普通いう complement の一部に過ぎないか又はその範囲外にまで及び、必ずしもそれと一致しない。これに対し Mason, Nesfield, Palmer は主格補語、目的補語という名称を用いる点に於て、本邦学校文法と一致するものである。主格補語に当るものに対する名称も文法家によって異なるが、特に、学校文法の立場より普通目的補語とみなし得ると想像されるものに対する諸家の取扱いは下に見られるような多様性を示している。

Sweet (*N. E. G.* §267) I want him *to come*. (Object-complement)

I like boys *to be quiet*. (")

Sonnenschein (*A New English Grammar*, §31)

Our losses have made us *thrifty*. (Predicative

Adjective) (*Ibid.*, §487) England expects

every man to do his duty. (Direct Objects)

Onions (*Adv. Eng. Synt.* 6, §5) Nothing makes a Stoic *angry*.

(Predicate Adjective)

(*Ibid.*, §174) Report declared *him to be dead*.

(Accusative and Infinitive)

- Jespersen (*Phil. of Gram.*, P.122) I found *the cage empty*.
 (Nexus-object)
 " (*Essentials*, 29. 1) " (Simple Nexus as Object)
 Poutsma (*Grammar*, vi. §17) He made the man *angry*.
 (Predicative Adnominal Adjunct)
 Curme (*Syntax*, p. 125) I saw him *come*. (Objective Predicate)
 中島文雄 (『文法論〔14〕英語青年, CIV. 6.)

They felt the house *shake*. (Object Predicative)

The sun keeps us *warm*. (Object Predicative Complement)

§2. さて Jespersen (*Essentials*, 29. 1) は I found *the cage empty*. と Her stubbornness made *him angry*. の斜体の部分を何れも Simple Nexus as Object としている。しかし後者を目的語と見ることは明らかに無理がある。彼がこれらと共に Simple Nexus as Object の例としてあげている They called *him James*. や This will drive *him mad*. や She flung *the window open*. の例についても同様である。「彼が James であること」を call するというのは nonsense である。They call him……では文意が不完全である故に、目的語 him に関して叙述 (predication) を完全ならしめる語として James が補われるのである。かく見てくれば補語という名称及びその中に籠められた考え方には依然捨て難い魅力が存することが感じられる。又この文が受動態になると目的補語は主格補語となるわけで名称に一貫性が保たれる点も好都合である。Jespersen (*Essentials*, 29. 17) では I found the cage empty. が受動態になって The cage was found empty. になると empty だけが predicative (述詞) と呼ばれるのである。

§3. さて次に、先にあげた I found *the cage empty*. と Her stubbornness made *him angry*. の斜体の部分の性質の相違を考えて見る。此 angry は make という動詞の表わす動作の結果を表わしているのであって、目的語 him の至り着く状態を示すのは勿論であるが、同時に筆者の

考えでは動詞の表わす動作の仕方を規定する。(主格補語にも同じ事が有る。The moon shines bright. の bright は the moon の状態を表わすが、それと共に動詞 shine の動作の仕方を規定している。この点 brightly と同じ。)ところが I found the cage empty. は事実上 I found that the cage was empty. という事になり、Jespersen の言うように the cage empty が find の目的語を為すとも見られ、empty は直接には the cage にのみ関係し、empty が単独で find という動作の仕方を規定するのではない。こういう風に目的補語には、(1)それが動詞の表わす動作の結果を表わし意味上目的語及動詞の双方に直接関係するもの、と(2)然らざるもの、とがあるという風に区別して置きたいと思う。このことは上述の Jespersen の Simple Nexus as Object に関する疑問に光を投ずるのみならず、後述の、形容詞の補語の代りに副詞が来る現象、又は形容詞の補語が副詞とも解せられる現象の解明に資する所があるであろう。

§4. 次に副詞や前置詞句は補語になり得るかどうかの考察に入りたい。

I found him *away* on vacation.

We found the road *in a muddy state*.

You could fancy yourself *in an hotel omnibus*. (A. Huxley, "Young Archimedes")

We see the old year *out* and the new year *in*.

The joy of seeing her son *back safe and sound*……

We saw the ladies *into the brougham*.

He left his iron *on*. (アイロンをかけたままにしておいた)

He has his arm *in a sling*. (腕を吊っている)

What makes you *in such a hurry*? (*Essentials*, P. 310)

He takes it *for granted*.

などを見れば先程 They called him John についてのべたと同じ考え方によりこれら斜体の部分を目的語に関して補足され以て叙述 (predication)

を完全にする所の、目的補語と見るべきことは明らかであろう。これら副詞や前置詞句が目的語と Nexus をなし、目的語の性質・状態等を示すものであることは先程の形容詞の場合と何等変らぬのである。同様 *School is over*, *He kept at home*. 等は副詞・前置詞句が主格補語をなす例である。

§5. Sweet (*N. E. G.* §262) は *He is here*. という文は *here* なしでは意味をなさぬ (*conveys no sense whatever*) といっている。この見方からすれば *is* を存在の動詞 (*verb of existence*) とみて *here* を単に之を修飾する副詞とする見方は成り立たぬことになる。この *here* は従って補語であるというのが筆者の意見である。(Sweet は *subject-complement* なる語を用いない。従って *here* を補語だとはしていない。) *The book was on the desk*. の *on the desk* も同じく補語である。中島氏(「文法論 [15]」英語青年 CIV. 8.) はこの *on the desk* を *adverbial complement* と称され、*He is a sailor*. (*Predicative*) *He became a sailor*. (*Predicative Complement*) という風に細かく区別されるのであるが、筆者は補語一本で行くことにする。この点に於て Palmer と一致する。Palmer (*A Grammar of spoken English*, 2nd ed., §479) は *It is here*. の *here* を *It is in the other room*, の *in the other room* などと共に *subject-complement* だとしている。尚彼はこの場合の *here* が副詞の補語である所から之を特に *adverb-complement* と呼んでいる。彼の *A Grammar of English Words* では上の *here* 及 *in the other room* に相当するものをまとめて *adverbial complement* と呼んでいる。) §6. こうした副詞や前置詞句を補語に入れる効用がはっきりするのはこれからである。その前に補語となる副詞は如何なる種類のものかと調べる。(前置詞句はすべて補語になる可能性をもつ。これは次節にのべる) これも Palmer (*A Grammar of Spoken English*, 2nd ed., §388) が研究しているが、前置詞を兼ねた副詞と大体一致するのである。*out*, *away*, *back*, *forward(s)*, *backward(s)*, *together* などは前置詞にな

らないが補語になり得る。(§4の例文を参照されたい)。以上二種は概ね本来場所や位置に関する言葉である。これに *here* 及 *there* 及 *a-* で始まる副詞 (*asleep, abroad, alike, alive, etc.*) 及 *still, well* の如き副詞が加わるのである。(Palmer 自身言っているように同書 §388 の *Catalogue of Adverbs* は不完全であるので、同書の他の箇所及 *A Grammar of English Words* の所説を併せ考察した。) 筆者はこれに *how* を加えたい (*How are you? How do you feel?*)。

以上よりして *He is happily.* の如き文のあり得ざる理由は自ら明らかであろう。

§ 7. 次に前置詞句が補語になり得ることは上述の如く、補語となる副詞が前置詞を兼ねた副詞と大体一致することからも推測されるのであるが。副詞にならぬ前置詞の場合にあっても、前置詞句はすべて副詞句であると共に形容詞句ともなることから、すべて補語たる可能性をもつと言える。

(cf. *The plan proved of no use.*) 但し補語になっている前置詞句がすべて形容詞句であるとは言えないであろう。Sonnenschein (*A New English Grammar* §35) は前置詞句について(彼は之を補語とはみとめないが) *He is in the room,* のそれは副詞句であり、*He is in good health.* のそれは形容詞句だといっている。Curme (*Syntax*, p. 48) は *He is down and out.* や *The car is in good condition.* のような例をひいて斜体の部分を *predicate complements* とし且つ之を *used as adjectives* といっているが、*He is in the room.* のような場合については何とも言っていない。私見によれば例えば *I found him at home.* の *at home* を形容詞句と見ることは無理であり (cf. *I found that he was at home.*) 従って補語たる前置詞句が形容詞句・副詞句の何れであるかは、場合に応じて判断されるべきである。但しこの補語が、Curme の所謂 *predicate appositive* たる場合、又は準目的補語(吉川美夫、*英文法詳説*, P. 64.) たる場合に於ては、之を形容詞句と見るならば問題は

ないが、之を副詞句と見るならば、補語としての副詞句という見方以外に、単なる修飾語としての副詞句という見方も生じ、後者の場合は補語にならないために、結局補語と見るべきか見ざるべきか何れとも決し難い場合が生じる。例えば *The plan proved of no use.* 等の場合は問題ないとして、*He came home out of humor. The fruit arrived in good condition.* 等においては、斜体の部分は夫々 *ill-humoredly, safely* のように解釈すれば補語でなくなるわけである。(cf. *He came home weary.*)

§ 8. さてこうした副詞及びすべての前置詞句が補語になり得ることは明らかになったが、かくの如き副詞や前置詞句がすべての不完全動詞の補語となり得るわけではない。 *He became ill.* と言えても *He became out.* とか *He became down.* とかは先ず言えまい。一方 *They kept together.* とか *He kept at home.* とか、*He showed himself of noble spirit.* (Curme, *Syntax*, P. 121) *Her friends held her of little account.* (Jespersen, *Essentials*, 29. 1₂) のようにいえる。即ち動詞によって副詞・前置詞句の補語をとれないものがある。副詞や前置詞句が最も自由に補語になり得る動詞は *be* 動詞である。*He is out. He is down. He is home. He is of noble spirit.* などと言える。所が *be* 以外の動詞で副詞や前置詞句を主格補語にとる例(目的補語が文の態の転換によって主格補語となった場合を除く)は少ない。これに反し目的補語に副詞や前置詞句をとる動詞は多い。これは何故であろうか。目的語と目的補語の関係は *Nexus* であるから、目的補語が副詞・前置詞句の場合は両者の間が *copula 'be'* で結ばれたと同様の関係にある。実際にここに '*to be*' が入る事も多い。所が先程述べた如く *be* 動詞は最も自由に補語として副詞や前置詞句をとるものである。よって上述の現象の理由は明らかである。

§ 9. 次に補語としての副詞と修飾語としての副詞の違いを明らかにしたい。副詞が補語になるという事と、形容詞の補語の代りに副詞が来ることは別箇の事と考えられる。所が副詞が補語になるのは普通の事だという所

から、修飾語としての副詞までも補語にし兼ねまじき議論がある。これは筆者の考えによれば誤りで *It smells sweet.* の代りに *It smells sweetly.* という場合の *sweetly* は副詞が補語になっているのではなく、*He runs fast.* の *fast* と同じ修飾語なのである。*Everything comes in handy.* と *Everything comes in handily.* についても同様である。

(その他 *weigh heavy* と *weigh heavily*, *feel bad* と *feel badly*, *sound strange* と *sound strangely* 等参照。Shakespeare には *look merrily* のような形が見られる。)

§ 10. 先の場合形容詞の代りに副詞が来たのであるが今度は逆に副詞の代りに形容詞が来る事がある。*He arrived safely.* *The moon shines brightly.* の代りに *He arrived safe.* *The moon shines bright.* となるが如きである。この場合 *safe* や *bright* は形容詞であるから明らかに主格補語であって、主語の状態を表わしているのだが、動詞の動作の仕方も規定していると思われる。その証拠に *He arrived tall.* だの *The moon shines new.* (cf. *a new moon*) などとはいうまい。さればこの場合の形容詞は幾分か副詞的でありつゝ補語なのであって、*They stood listening to the speech.* の *listening* に相当し、形容詞が補語としての通常的位置をはなれる程に形容詞の副詞的用法への移行を示す。これは分詞構文に於ける分詞に相当する。以上の現象は形容詞の副詞への接近を示すものである。独乙語などで形容詞が一般に同時に副詞として用いられる現象と対比されるべきものであろう。これとは逆に副詞が形容詞に移行するのは特殊の場合に限られ、副詞が補語になる場合 (*The handle is off.* *The opportunity was not long in coming.*), *well*, *ill*, *poorly*, *badly*, *nice*ly 等や a- で始まる多くの副詞 (Onions, *Syntax*, §25), 又 *a down town*, *the then king* などの場合に限られるのである。

§ 11. 次に主格補語或は目的補語の形容詞が副詞とも解せられる場合について述べる。*stand firm* の *firm* は *adj.* (Onions, *Syntax*, P.33.)

であるが *S. O. D.* に *adv.*, and *quasi-adv.*, chiefly in *phr.* to stand f. (lit. and fig.), and to hold f. (to) ME. と記載されており, *live remote from*…… の *remote* は *C. O. D.* では *adj.* であるが *S. O. D.* に *In quasi-adv. use: At a distance, far off* 1667 とつけ加えてある. 又 *cut the hair close* の *close* は多くの辞書は之を *adv.*, としつつも, *S. O. D.* に *For the adverbial use of the adj. closely is now preferred.* とするされ, 又研究社新簡約英和辞典には多く *pred. a.* の性質に近い用法で, 明らかな *ad.* としては *closely* を用いる, とある. 又この *close* を *adv.* であるが *adj.* とも解し得るとしている辞書もある. *Pull the rope tight* の *tight* は *S. O. D.* に *adv.* (The *adj.* used *advb.*) としてある.

こういうことが起るのはすべて主格補語の場合か又は結果を表わす目的補語の場合に限られる. その理由は初めにふれた如く, この場合補語が主語又は目的語の状態を表わすのみならず, 多少とも動詞の動作の仕方を規定し従って副詞的であるからであって *close* の例でいうと, 初めから *cut the hair closely* と副詞を用いてもよいのである. (cf. *She painted her face thick. She painted her face thickly.*) 所が補語が結果を表わさない *I found it easy.* のような文においては *easy* は *found* と直接関係しないのでこのようなことは絶対に起らず, もし *I found it easily.* とすれば全く別の意味になってしまう.

こういう風に主格補語又は目的補語が形態上形容詞とみて差支えなく, 且又これに並行して副詞形を用いる形式が存在する時でさえ, この形容詞自体をも或は之を最初より副詞と考え, 或は擬似副詞と考えることがあるのは興味深い現象である.

§ 12. 次に前置詞句について尚若干の考察を試みたい.

(1)	(2)	(3)
keep it <i>secret</i>	paint it <i>green</i>	grind it <i>small</i>
keep it <i>in secret</i>	paint it <i>in green</i>	grind it <i>to powder</i>

(2)の上の green は言う迄もなく目的補語であるが下の in green はどうか。(2)の上の句と下の句に意味上の差はないが、意味が同じであるからして in green を直ちに目的補語と論断することは出来ない。(cf. The moon shines *bright*. The moon shines *brightly*.) in green が形容詞句ならば目的補語であることは見易き理であるが、(cf. He showed himself of *noble spirit*.) この場合 in green が形容詞句であると判断すべき明らかな根拠はない様に思われる。副詞句であるとすれば先に §7 で論じた理によってこれを目的補語と見ることも出来、単に paint を修飾する副詞句と見ることも出来る。事情は先の cut the hair close の場合と同じである。in green を paint を修飾する副詞句と見ることはこの close を closely に等しいと見ることに相当し in green を副詞句でありつゝ目的補語と見るのは close を擬似副詞と見るのに相当し、in green を形容詞句と見るのは close を形容詞と観ずることに相当するであろう。然るに(1)に於ては事情を異にし上段 secret は形容詞の補語であるが下段の句は「それをこっそり貯えておく」の意で in secret は明らかに修飾語としての副詞句である。(3)の上段の句は「細かく砕く」で small は一見形容詞の目的補語に見えるが、実は副詞であるので、下段の句「粉碎する」の to powder は尚更 grind を修飾する副詞句のように思われるが、意味の類似は必ずしも文法上の語の性質の類似を意味しないので此処で一考しなければならぬ。この to powder を grind を修飾する副詞句と見ることも出来るが、it と to powder は同じ物について言われているので、to powder が前置詞句である以上、to powder は it の目的補語とみなされ得る資格がある。中島文雄氏(「文法論[16]」英語青年, CIV. 9.)が、He broke the cup in pieces. の in pieces を(Adverbial modifier でなく) Adverbial complement と見るのが正しいと思うと言われていることを附記しておこう。

§ 13. さて以上種々論じて来たがこのような見方に抵抗を感じられる方も多いと思う。学校文法としてはデリケートに過ぎるとも想像される。しかしながらかくの如き見方の効用は実はこれから立証されるのである。

He threw the dog down. (なげ倒した) The police held the crowd back. (阻止した) なぜこういう意味になるのか? 私見によれば down や back をただ漠然動詞を修飾する副詞と見ている限り真相を握めない。この down や back は目的補語であり、動詞の表わす動作が目的語に及ぼす結果を表わすのであり、従ってその結果の完成時に於ては The dog is down. The crowd is back. の関係が存し、夫々犬が倒れている、群衆が其場所より前に出ず後方に止まっていることを示している。だからたゞ下の方へなげるとか、後の方へ hold する、又は hold し返す(どういう意味になるだろう?) というのとは違ふと思う。(現にある教科書にはこれを「おしかえす」と誤訳している。)

They found him in the cave. に於て通例 in the cave は目的補語と意識されてよいであろう。I saw him in London. の in London は saw を修飾する副詞句である。I saw the birds on the wing. はかくて二様に解釈できよう。

The birds are flying. →	The birds are on the wing.	}	→ I see
The flying birds. →	The birds on the wing.		
the birds on the wing.			

又次のような語句の理解はやはり目的補語的認識(?)をまっぴら徹底するのではなからうか。

He wanted me back. 知に帰って来てほしいと言った。

He wanted it over. 彼はそれがすんで欲しかった。

I asked him over. 彼を訪ねて来給えと云った。

I shall not send for you back. あなたに戻れと言ってやりはしません。

He was sent for *down*, 彼は二階から降りて来いと言われた。

knoch out 《学生語》門限後門を叩いて出る。

He lied himself out of trouble. という句は長い間日本の英和辞書で「自分から気休めを言って苦勞を忘れた」と誤訳されて来たらしいが、*lie* は元來他動詞でないで「自分をあざむく」という関係は生じない筈で寧ろ *himself out of trouble* という事態が *lie* という行為によって惹起されると見るべきであり、*out of trouble* は *himself* の目的補語であるから、「自らが *trouble* を免れること」という関係が成り立ち、従って全体の意味が「うそを言って罰を免れた」となるのは He walked off his headache. の場合と同様である訳である。

最近の英語青年(1966年9月号)に The audience shouted him *down*. とか He bowed me *out of the room*. 等における副詞(句)が独乙語の方では「撥動詞」(*Lativum*)ともいわれ、それらは「方向を示す副詞(句)」として、「結果の状態を示す形容詞」と区別しなければならないと説かれることが紹介され、且つ英語ではこの両者の区別が必ずしも明確でないようであるとして、そこに引かれた十箇の英語の例文中には、「目的補語と見なすことのできる例もあるようである。」と述べられているが、私見によれば、其処に出ている副詞句の例はすべて目的補語である。一般にかかる場合、こう見てこそ文法上の説明の一貫性もつき、又意味解釈も先程の例のような当てずっぽうのふたしかさを免れる一助にもなると思う。

以上従来とかく閑却され来った様に思われる問題をとり上げた積りであるが、多少瑣細に亘る個所もあったかと感じられる一方、全体として紙面の関係上十分に考えを陳べ得なかつたことを遺憾とする。終りに参考文献を記して感謝の微意を表したい。

参 考 文 献

細江逸記, 精説英文法汎論. 泰文堂. 1942.

- 勝又永朗, 「「搬動詞」なる現象について」 (『英語青年』VoI. CXII No. 9.)
- Mason, C. P., *Mason's Senior English Grammar*. London (Bell and Sons). 1920⁶.
- 中島文雄, 「文法論」 (『英語青年』VoI. CIV No. 6, No. 8, No. 9.)
- Onions, C. T., *An Advanced English Syntax*. London (Routledge and Kegan Paul). 1932⁶.
- 大塚高信 (編), *語法の調べ方・総索引*. 研究社. 1959.
- Palmer, H. E., *A Grammar of Spoken English*. Cambridge (Heffer). 1939².
- , *A Grammar of English Words*. London (Longmans). 1938.
- , *The New Method Grammar*. London (Longmans). 1938.
- 空西哲郎, 「Complement と Adverb」 (『英語青年』VoI. CX No. 6.)
- 吉川美夫, *英文法詳説*. 文建書房. 1949.